魔女(まじょ)になりたくない女の子

アンナ=ベネット作
磯村愛子訳

933 Bennett, Anna Elizabeth
(NDC)

魔女になりたくない女の子

アンナ＝ベネット著　磯村愛子訳

学習研究社

176p　図　23cm（新しい世界の童話シリーズ）

原題：LITTLE WITCH

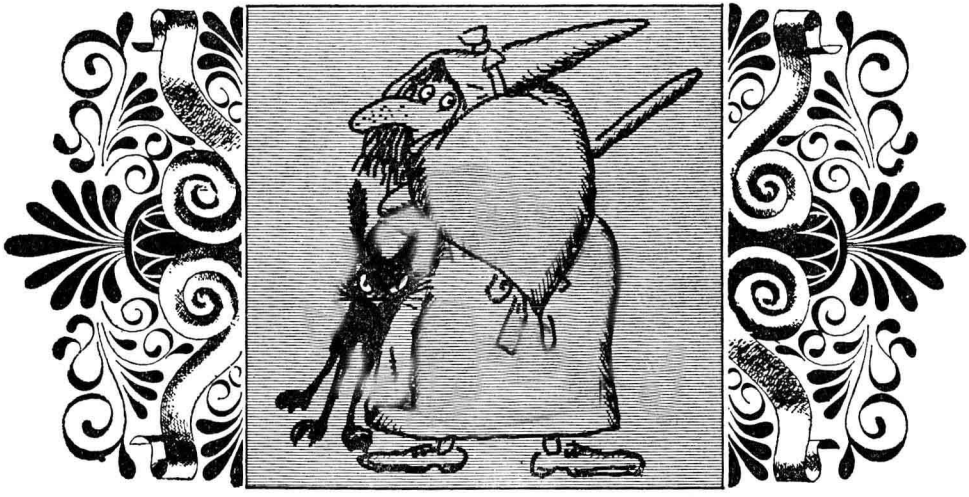
女になりたくない女の子

アンナ＝ベネット作

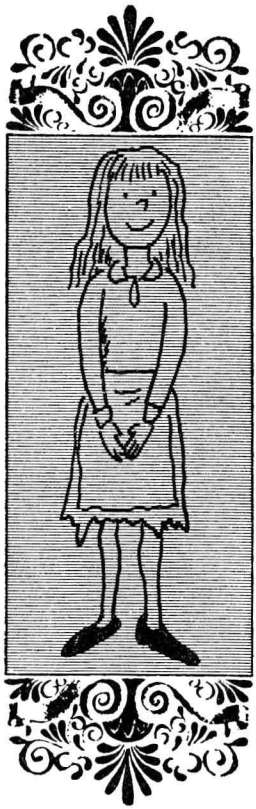
磯村愛子訳

むかい ながまさ画

LITTLE WITCH



Little Witch



魔女になりたくない女の子　もくじ

1　魔女の家……5

2　ミンクスの入学……16

3　空とぶほうき……28

4　水の精……42

5　ビーンポット探偵……54

6　なぞの鉢植え……70

7 バースデー・ケーキ……82

8 うつくしい妖精……98

9 黄色いこなの実験……112

10 魔女の裁判……128

11 魔法の鏡……144

12 ムーンファイアーの恩がえし……162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

LITTLE WITCH
Anna Elizabeth Bennett
Original English edition published
by J.B. Lippincott Company, Philadelphia & New York

●訳者のご紹介

東京に生まれ，津田塾大学をご卒業後，日本放送作家協会に所属して活躍されております。主な訳業に「長くつ下のピッピ」「超人ハルク」「屋根の上のバイオリン弾き」などがあり，数多くのお仕事をなさっておられます。

1　魔女の家

町じゅうでいちばんぶかっこうな、いまにもつぶれそうな古い家に、スニッカスニーという名まえの、年よりの魔女がすんでいました。町はずれにあるその小さなうすぐらい家は、戸口の踏み段までくさっておちそうでしたが、魔女は、ほうきにのってとびまわってばかりいて、なおすどころではなかったのです。

ところで、魔女のひとりむすめは、この家がだいきらいでした。それで、明るくてきれいなよその家を、いつも、うらやましそうにながめていたのです。むすめは九歳で、名まえをミニキンといいましたが、魔女にはミンクスとよばれていました。そして、ミンクスは、魔女の子に生まれてしまったことが、いやでいやでたまらなかったのです。

さて、こんやも、魔女はでかけるしたくをしていました。ほうきにのってとんでいっては魔法をつかってさわぎをおこすのが、魔女のたのしみだったのです。

「もうそろそろ、ついてきたいとはおもわないのかい、ミンクス？　おまえはもう、一週間ものあいだ、ほうきにのってないだろ。」

魔女は、カラスのなくような、しわがれた声でいいました。

「いやよ。空の上はまっくらでさむいから。」

ミンクスが、すぐに、きっぱりとことわりました。

「ほんとにいうことをきかない子だよ。あたしゃ、そんな子をもったおぼえはないんだ！　いっとくけど、いまのうちになんでもちゃんとしないと、りっぱな魔女になれないんだからね！」

魔女は、がみがみとわめきたて、小さな赤い目でミンクスをにらむと、鳥の巣のようなもじゃもじゃ頭に、とんがりぼうしをひょいとのせました。

「ああ、いいとも、そんなにえらそうなことをいうんだったら、こんやはうちで、のろいぐすりをせんじておいで！　それもいやだというんなら、あしたは、なんにもたべさせないからね！」

魔女が、やっとほうきにのって、あけっぱなしの戸口から夜の空へとびあがるのを、ミンクスはほっとして見送りました。

やがて、ミンクスは、古い鏡台の前へいくと、ひじをついてよりかかって、鏡を見つめました。ひびのはいった鏡には、大きくてすんだ青いひとみに、やさしい口をきりっとむすんだ、かわいいやせた顔がうつっています。ミンクスは、あごのえくぼが気にいらなくて、ほほにあってくれればとおもっていました。でも、いまになっては、魔法をつかってもかえることはできません。ミンクスは、鏡台の引き出しをかきまわすと、歯のかけたくしをさがしだして、肩にかかる黒いかみをとかしました。それから、きゅうに息をのんでとびあがると、すばやくうしろをふりむいたのです。

「ああ、あたし見たわ！　いま、ちゃんと見えたんだから！」

ミンクスは、ひとりぼっちのへやの中で、大きな声をだしました。そして、もういちど、鏡を見つめたのです。

「こうやって鏡を見ていると、きっと、あの人が見えるんだわ！　とてもうつくしい女の

人が、うしろからじっとあたしを見ている。でも、ふりむくともういないのよ。」

ミンクスは、ため息をつきました。それから、自分に号令をかけるように、もういちどひとりごとをいったのです。

「さあ、のろいぐすりをこしらえなきゃ！」

ミンクスは、魔法のなべをたなからおろして、料理用ストーブにのせました。古い型なので、つかうときはまきをたくのです。ミンクスは、まず、火をおこしてから、魔法のこなをとりにいきました。

「いやだわ、こんなことするなんて！　きっとまたおかあさんは、どこかの子どもに魔法をかけるのよ。まるであたりまえのことみたいに！」

ミンクスは、はばのひろい窓べりにならべてある、七つの鉢植えのそばへよりました。それぞれにちがう花がさいています。といっても、それはふつうの花ではなく、魔女をばかにして、鉢植えにされた七人の子どもたちだったのです。ミンクスが、水をやったり陽をあてたりして、だいじにせわをしていました。また、ミンクスは、なんとかしてこのの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ろいをといてやり、もとの子どもたちにもどしてやりたいとおもっていたのです。

「かわいそうに、みんな元気をだしてね。ほんとうに、たすけてあげたいのよ。だって、もとどおりにしてあげれば、あそんでくれるかもしれないでしょ？」

七つの花がちょっとゆれて、うなずいたように見えました。いままでずっと、ミンクスはなかまはずれにされていました。町じゅうのこどもたちが、魔女の子をこわがっていたからです。

ふと、ミンクスが目をかがやかせました。

「そうだわ！　おそろしいせんじぐすりなんかつくるのはやめて、いつもの実験をすることにしよう！」

ミンクスは、たなの上にずらりとならんでいる、魔法のこなと魔法の液体のびんをながめました。数えきれないほどたくさんのびんに、ぜんぶちがう色のこなや水がはいっていました。ミンクスは魔女がでかけたあと、毎晩のように実験をしているのです。どうすれば妖精がでてきてくれるか、いろいろなこなをつかってためしてみていました。ミンクス

は、妖精というものを見たことがなかったので、いちどだけでも見たいとおもったのです。そして、いままでの実験では、魔法のなべの中から、ヒキガエルがうじゃうじゃとびだしかけたのと、大きな風船がいくつもうかんだだけでした。ミンクスは、実験をするたびに、こんどはなにがあらわれるかと、胸をわくわくさせたものです。

さて、そこへ、魔女のお気にいりの、大きな黒ネコのスクーチャーがかえってきて、ミンクスの足にからだをこすりつけました。その、いじわるそうな黄色い目は、なんでも見とおしているように見えます。

「さあ、いい子だからね、スクーチャー、あっちへいっといで。」

ミンクスは、心の中で『このわるいやつめ』と、つけくわえました。なんにもしらない黒ネコは、あと足でちょっと、背中をかくと、ごろりところがってじゃれてみせました。

やがて、魔法のなべの中で、ぶくぶくとあわだちながら、魔法のこながにえたってきました。とてもきれいなピンク色で、こんどこそうまくいったようです。ミンクスは、胸をどきどきさせながら、しっかりと手をにぎりあわせました。いったい、なにがあらわれる

でしょうか！　もしかすると――ああ、もしかすると、妖精では？

ところが、まず、さいしょにあらわれたのは、大きな耳につりあがった目の、あごのしゃくれたきみょうな顔でした。それから、こどもの胴体と、そして――なんということでしょう！　あとは子馬のからだでした！　上半身が男の子で、下半身が馬という、そのきみょうな生き物は、魔法のなべからとびだすと、ひずめをならして床の上に立ちました。

ミンクスは、気味わるそうに、たずねました。

「な、なあに、あんた？」

「ばかだな、セントーにきまってるじゃないか。半分男の子で、半分が馬さ。」

そのとき、ネコのスクーチャーが、毛をさかだて、背中をゆみなりにすると、ものすごいうなり声をあげたのです。

「しずかにしろ、この悪魔め！」

セントーは、声をはりあげてどなりつけました。

スクーチャーは、するどいつめをむきだしにして、セントーにとびかかっていきましたが、かたいひずめで頭をけられ、ながながとのびてしまいました。

「性悪なネコはだいきらいだ！」

セントーは、はきすてるようにいうと、ミンクスにむかっていいました。

「さあ、はやくいってくれよ。なんで、このセントーさまをよびだしたんだい？」

「よびだした？」

ミンクスが、ぽかんとしてたずねました。

「魔法をつかってよびよせることだよ、おばかさん。それから、たのみごとをいってくれないか、もうじききえなきゃならないから。」

「あの、あたし、たのみごとなんてないけれど。実験をしていただけだから。」

ミンクスが口ごもっていいました。

「へえ、そうかい。それじゃ、こっちはむだあしをしたわけか？」

「あたしは妖精をだしたかったの。」

ミンクスが、すまなそうにこたえました。

「妖精だって！　あんなつまらないちびのおかげで、このセントーさまがひまつぶしをさせられたのかい。じょうだんじゃないよ。それじゃきみは、おとぎ話を信じてるのかい？あんなものは、みんなつくりごとだぞ！　わるいことはいわないから、妖精のことなんかわすれてしまうがいい！」

小さなセントーは、のけぞって大笑いをしたのです。

ミンクスは、おこってセントーをにらみつけました。

「よけいなことをいわないでちょうだい！　なによ、セントーのやきもちやき！」

すると、きゅうにセントーがとびかかってきたので、びっくりしたミンクスはあとずさりしました。セントーは、ひずめをたかくあげてミンクスをおどかすと、大声でどなりちらしました。

「いいか、気をつけて口をきけよ！　黒ネコがどうなったか、わすれるんじゃない！　おまえのところへなんか、もう二度とでてきてやらないからな！　こっちは、せっかく晩めしをくっていたのに！」

ところが、わめいているうちにセントーの声がかすれてきて、からだの形がぼやけてきました。そして、うれしいことに、きえてしまったのです。ミンクスは、大いそぎで魔法のなべをあらうと、もとのたなの上にもどしました。のろいぐすりをこしらえておかなければ、おかあさんにおこられるのはわかっていましたが、くたびれてねむくなってしまったのです。

ミンクスは、床の上のぼろ毛布にくるまると、そのままよこになりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com